

## ヨシエビの催熟試験

ヨシエビは、クルマエビ科に属し、クルマエビに次ぐ高級品であり、岡山を代表するエビです。水産研究所では昭和53年度からヨシエビの種苗生産を開始し、平成21,22年度に一時休止したものの、平成23年度から再開し、現在は年間400万尾を目標に生産を行っています。本種の生産は、6月下旬に天然エビから採卵し、約60日かけて15mmの種苗に育成します。さらに50日程度中間育成し、約40mmで県下各地の沿岸に放流しています。

ところが、近年、種苗生産で使用する親エビを十分に確保できない状況となっています。これまで、漁獲されたエビから十分に成熟した雌を選び、生産に必要な卵を得ていましたが、漁獲量が減少し、10年前と比べると、種苗生産に用いた1日あたりの親エビの数は、年度ごとの変動はあるものの、1/2以下にまで減少しています(表1.)。

| 年度 | H23 | H29 | H30 | R1 | R2 | R3 |
|----|-----|-----|-----|----|----|----|
| 尾数 | 135 | 76  | 4   | 31 | 51 | 38 |

表1. 種苗生産に用いた年度別親エビ数(尾/日)

また、今年度は使用した親エビの産卵率が1回目に21%と低かったため、追加して親エビを確保しました。幸いにも2,3回目では、それぞれ72%、86%と産卵率は、大きく改善したものの、親エビや卵の確保に不安を残しました。これらの要因は、資源量の減少に伴い十分に成熟した親エビも少なかったことや、水温の変化による成熟・産卵の不安定化など様々なことが考えられます。

産卵率を向上させるため、クルマエビでは、眼柄を除去することで人為的に催熟を図る手法が知られています。しかしながら、この手法は親エビへの負荷が大きいことや、ウイルス性疾病のリスクなどの課題があります。また、ヨシエビは、クルマエビに比べ、眼柄の除去による人為的な催熟の知見が少なく、不明な点も多く残っています。そこで、今年度、産卵しなかった親エビを用いて片眼の眼柄除去試験を行いました(図1)、飼育個体の約半数が死亡したうえ、生残した親エビは十分に成熟しませんでした。

今年度は、のべ3日間で種苗生産に利用する親エビを入手出来ましたが、今後、生産に必要な卵を十分に得られない可能性が考えられます。そのような状況に備えて、より有効な眼柄の除去方法や飼育水温などについての試験をさらに実施し、疾病リスクが少なく、かつ効果的に産卵を誘発できる知見と技術を蓄積し、種苗生産の安定に努めていきたいと考えています。

(栽培・資源研究室：西林)

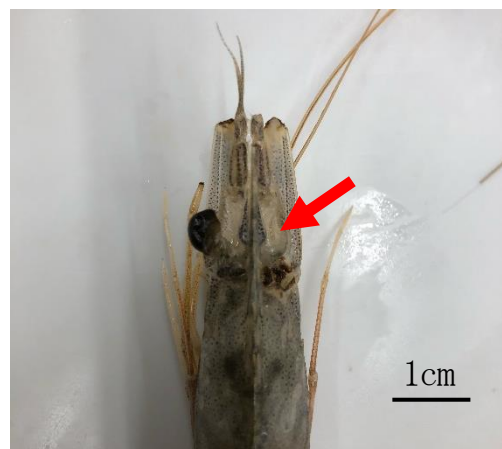


図1.片眼の眼柄除去を行った雌エビ